新時美術評

近藤誠一

9月半ば、久しぶりに東京都交響楽団の生演奏を聴いた。現代舞踊とコンサートマスターの共演という異色のプログラムと、ベートーベンの「英雄」交響曲だ。かつてない感動を覚えた。生の演奏ならではの空気の振動を感じただけではない。指揮者も楽員も半年以上にわたり、演奏会も仲間との練習もないという、経験したことのない苦しみを耐えてきた。そしてやっとホールで聴衆を前に演奏ができ、それが彼らの生き甲斐であることを感じ、その歓喜の気持ちをひとつひとつの音に込めているのが手に取るように分かったからだ。

真の価値があるのだ。

コロナ後の「新しい生活様式」ではデジタル化が進み、人の移動や集中を最小限にした効率的な生活になると予想されている。音楽や美術も画面で鑑賞する機会が増えるかも知れない。

た民主的社会はできない。

二つ目は、著名な作家や演者は録画でもある程度仕事はできるが、地方でこつこつと努力している若手にはそうした機会が与えられず、伝統工藝や伝統藝能の後継者の減少にますます拍車がかかることである。

去る5月、「日本和文化振興プロジェクト」という一般社団法人を立ち上げた。広いジャンルにおいて、日本の伝統的美意識や価値を、現代社会のライフスタイルに沿うような形で作品に表現している若手の作家の作品コンテストを行うものだ。その特徴は、シャネルのリシャール・コラス会長を初め、著名な

日本和文化グランプリ

数日後に、東京国立博物館の「工藝2020―自然と美のかたち―」を観た。人間国宝クラスの作品が、建築家の伊東豊雄さんのデザインのゆったりした温かみのある空間に展示されるという、これも新たな、極めて贅沢な企画であった。人数制限の中で、ひとつひとつの作品をじっくり鑑賞できた。展示室に来ておられた何人かの作家の方々と言葉を交わすという貴重な機会も得られた。これも忘れ得ぬ想い出になった。

芸術作品とは、その色や形、音や演技自体ではなく、作り手と使い手（鑑賞者）の間の感動の共有の仲立ちをするところに

そこには問題が2つある。

第一は利便さのために、本物や生演奏に触れる機会が大幅に減ると、上述のような芸術の本質への理解がいつの間にか社会から失われることだ。さなきだに繊細で洗練された伝統工芸の価値は現代生活で十分評価されていない。茶碗を手にとり、その色や形を選んだ作り手の意図に思いを馳せ、それで一服のお茶を頂くことを想像して初めて価値が分かり、日本人としての自覚を新たにする。子供たちがこうした生の芸術の力を知る機会が乏しくなり、心からの感動や共感を知らぬまま育っていくようでは、心が充実し、成熟し

審査委員によって選ばれた優勝者に「グランプリ」として賞金が授与されるだけではなく、その作品が市場とつながるような仲介をすることである。ユナイテッドアローズの重松名誉会長（副理事長）を初め、実際に市場の一部となっているプロが理事に名を連ねている。

初年度である今年の公募が始まり、年末には審査を終え、年明けには表彰式を開きたいと思っている。すでに全国から様々な照会がきていることは、このプロジェクトが社会のニーズに応えるものであることを示唆している。

（近藤文化・外交研究所代表）